

令和 6 年 度
宮崎国際大学 教育学部
一般選抜後期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題

次の文章は、社会学者である菅野仁（かんのひとし）さんが、先生と生徒の関係の在り方について述べたものです。菅野さんの意見を要約するとともに、それを踏まえた上で、あなたは子どもたちにとってどのような先生でありたいか、600以内で述べなさい。

私は教育大学で教えていますが、将来教師になる学生たちにいつも言うのが、「生徒の記憶に残るようなりっぱな先生をめざすことは、必ずしも必要ない」ということです。

なぜ私は、頭から冷水をあびせるようなことを学生に伝えようとしているのでしょうか。私から言わせれば、先生というのは基本的には生徒の記憶に残ることを求めすぎると、過剰な精神的関与や自分の信念の押し付けに走ってしまう恐れがあるからです。

だから、生徒の心に残るような先生になろうとすることは無理にする必要はなく、それはあくまでラッキーな結果であるくらいに考えるべきで、ふつうは生徒たちに通り過ぎられる存在であるくらいでちょうどいいと思うのです。自分が受け持ったいろいろな生徒のなかで、とても幸運なことに「ああ、あの先生よかったな」と記憶に残してもらえたならば、それはもうラッキーこの上ない、満塁ホームランみたいなことなんだというくらいの構えでいいと思うのです。それこそ金八先生みたいなタイプこそあるべき先生だというのは、ちょっと違うんじゃないかなと。学園ドラマの先生のようなことをやろうとすると、生徒の内面を無理矢理いじることになるから、それはとても危険なことなんだよ、ということを学生たちには伝えています。

本当にやらなくてはいけないのは、生徒たちに自分の熱い思いや教育方針を注入することよりも、自分の教室が一つの社会として最低限のルールを保持できているようにすることです。

例えばいじめで自殺する子がいる学校というのは、どういう状況になっているのか。子どもが、生命の安全が保障されないようなところで毎日通わなければならないということですよ。生命の不安を感じながら子どもが毎日学校に通うなどということは、それこそ社会的にはあってはならないことで、そういうことが起こらないように、先生は何よりもまず学校という空間における最低限のルール性の維持・管理をしなければいけないのです。いくら学校がつまらなくたって、一応そこへ行っても危害は加えられないことが保障されているのが当然で、それをきちんと管理することが先生の最低限の役割なのです。

先生であるからには、どうしても生徒の人格にまで影響を与えなければならないと思ってしまうがちですが、そんなふうに積極的に思わなくても、先生という存在は生徒の内面にかなりの影響を与えてしまうものです。生徒に一番大きな影響をもつ「教育環境」が先生という存在です。あの先生に教わったからこの教科が好きになった（あるいは嫌いになった）ということをよくありますよね。先生は生徒と関わる限り無色無臭ではられないのです。

しかし逆にいえば、生徒の人格の育成にまで、先生が責任をもつことは本当はできないのです。だって担任になったとしても、たかだか一年か二年のことです。その子供に一生関わられるわけではないのですから。つまり先生は、自分が帯びてしまう影響力の大きさと自分の影響力の責任の限界を、同時に見据えるクールな意識を持つことが求められているわけです。

(菅野仁「友だち幻想」による・一部省略がある)